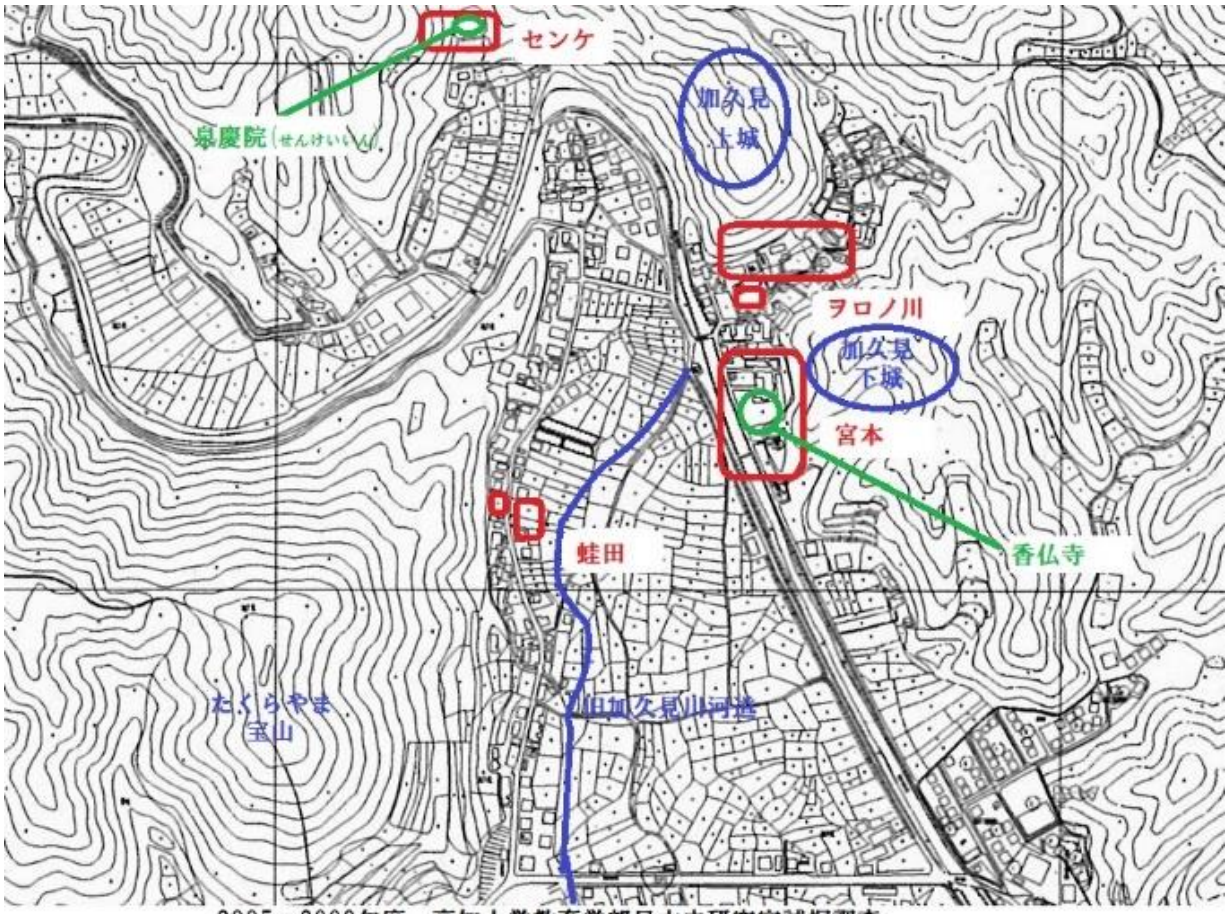
=市史編さん便り=　【第 17 号】 令和３年７月５日(月) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

土佐清水市域で出土した「中世埋蔵文化財」

土佐清水市加久見地区は、2005～7 年度に高知大学教育学部日本史研究室（市村高男教授）による科学研究により加久見地区一帯の試掘確認調査が実施された。

これにより加久見区長場前、矢熊地区（通称「センケ」）の畑地、宮本地区の民家の庭及び畑地、加久見香仏寺境内等の遺物・遺構の検出を行った。



2005～2009年度　高知大学教育学部日本史研究室試掘調査
土佐清水市教育委員会国庫補助試掘調査

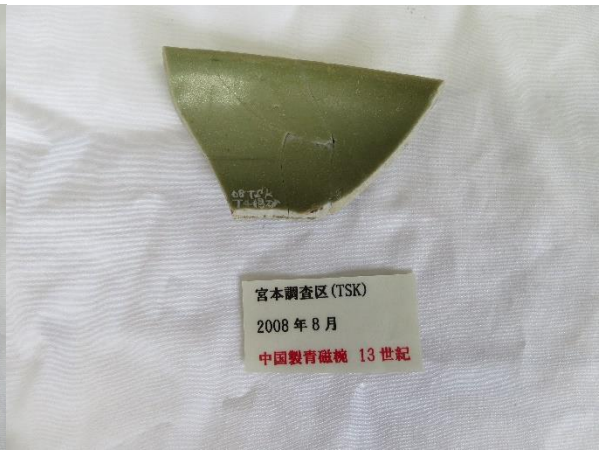
また、これに呼応して 2007～9 年度に土佐清水市教育委員会でも国庫補助事業を受けて学術調査としての矢熊地区の中世石造物調査、ヲロノ川・下蛙田の試掘確認調査などを実施した。これらの二つの調査により、ベールに包まれていた土佐一条氏外戚・加久見氏の実態が徐々に解明されてきた。宮本地区からは、中世前期（13 世紀中～後期）と中世後期（15 世紀）の遺構２面が検出され、これらは土地の豪族加久見氏に関わる館跡の遺構ではないかと推測され。おそらくは加久見氏の館跡の遺構に間違いないだろう。

ここからは、瀬戸焼・常滑焼・備前焼甕と擂鉢・楠葉型瓦器碗・東播系須恵器鉢な

↑15 世紀代に使用されたカワラケ片

↑13 世紀代に常滑焼の壺片

↑加久見地・宮本地区で出土した銅銭片



↑13 世紀の中国製の青磁碗片

どの国内産の陶器片とともに、龍泉窯系青磁・高麗青磁・龍泉窯系青磁蓮弁文碗・青白磁梅瓶・白磁D類皿・天目茶碗・宋銭などの中世埋蔵文化財が出土した。

これらの状況証拠から、中部地方や機内との交流、東アジア・東南アジアとの私的貿易が行われていた可能性が高くなった。

明国の鄭竣功が当時の浙江省総督の命により日本を訪問し、大友宗麟に２年間ほど幽閉されたものの日本に関わる調査を行い、帰国後に『日本一鑑』を著した。当時フロイスなどの西欧の宣教師サイドから日本に関する史料は数多くあったが、アジア（明国）サイドからの日本に関する史料は少なく貴重であった。

ここには、九州東南岸⇒土佐国島嶼部⇒土佐湾岸⇒紀伊水道⇒紀淡海峡⇒泉州堺までの「夷海右道（いかいうどう）」の航路が記され、ここに「清水」の地名も登場する。土佐清水は日本史レベルを超えて、東アジアのなかの「土佐清水」として考察していく必要がある。土佐清水市の歴史は、自分たちが当初考えていたより、スケールがはるかに大きい。

加久見氏居館跡試掘確認調査では、輸入貿易陶磁や国産陶器の破片が多数検出された。そこで陶磁器について若干の説明を以下に記す。

◎「やきもの」についての基本事項を⑴材質種類、⑵作り方、⑶焼き方に分けて簡単に説明しておきたい。

⑴材質による分類

①土器、②炻器（せっき）、③陶器、④磁器の４つに分類できる。

①土器

粘土を整形し、700～800℃の比較的低い温度で焼成した無釉のやきものを指す。日本では縄文土器・弥生土器・土師器などがこれにあたる。強度には乏しいが、製作し易く安価で、火に強い。直接火にかけ使用できる。

②炻器（せっき）

堅く焼き締められたやきものの総称で、西洋でいうストーンウエアがこれにあたる。日本では、須恵器・備前焼・信楽焼・常滑焼などの焼き締め陶をこの分野に含めている。

③陶器

陶土を主原料にし、ひかりを透過する性質がなく、若干の吸水性を持つもので、「土もの」ともいわれる。焼成温度は 800～900℃、ものによっては 1200℃のものもあり、様々である。また、釉薬をかけるものと、無釉のものがある。炻器（せっき）も含めて陶器と呼ぶ場合もある。

④磁器

陶石・カオリン・長石・ケイ石などを原料とし、「石もの」と呼ばれる。これに対して陶土を主原料にする土器や陶器を「土もの」と呼ぶ。焼成温度はやきものの中で最も高く 1400℃を超えることもある。吸水性はなく、光通過する性質がある。日本では 17 世紀以降に作られるようになった（有田焼）。それ以前は、中国や朝鮮半島から輸入した。

⑵作り方による違い

①粘土紐輪積み

粘土を紐状にして輪のように積み上げていく。回しながら積み上げていくものを「巻き上げ（紐造り）」という。日本でも縄文土器以降、５世紀代に朝鮮半島からロクロが伝えわるまで行われてきた。

②手びねり（手づくね）

ロクロを使わずに、土の塊を指先で伸ばし、成形していく。小型の器物や信楽碗などを作る場合によく使用される技法である。

③ロクロ挽き

陶土を回転台に乗せて回転させ、遠心力を利用して挽き上げて成形する技法。手で回すロクロと、足で蹴って回すロクロがある。②で述べたように５世紀代に朝鮮半島から伝播された。回転方向は右回転と左回転があり、瀬戸焼・美濃焼は前者、中国は後者であり、九州や朝鮮半島系は左右混在している。

④たたら

板状にした陶土を貼り合わせて器の形に成型する技法で、たたら作りともいわれる。

⑶焼き方の違い

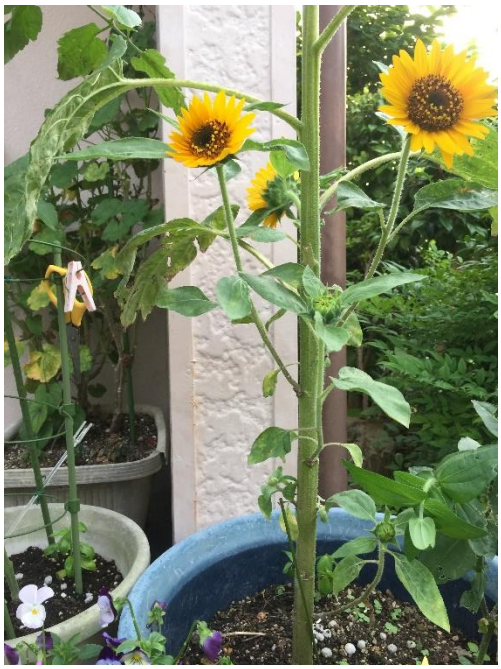
野焼、地面にそのまま焼くか、浅井穴をほって製品を置いて薪をかぶせて焼く方法。縄文土器・弥生土器・土師器の一部がこの方法で焼成される。

穴窯、斜面に穴を掘り抜くか、溝状に掘り天井をかけて、トンネル状にした窯。「登り窯」と呼ぶこともある。

その他、**平窯・大窯・連房式登り窯**などがある。

【参考文献】『器の教科書』宝島社、2014 年。

【編集後記】



以上、今日は「高知大学教育学部日本史研究室」と「土佐清水市教育委員会」が 2005～9 年度にかけて実施した加久見地区試掘確認調査で出土した中世・国産陶器片や輸入貿易陶磁などについて記述しました。今週 8 日（木）に三崎小学校 6 年生の社会科の授業でこれら埋蔵文化財を教材として活用し、授業を実施する予定です。これら埋蔵文化財を手に取って触れながら学習してもらいます。甕・擂鉢・茶碗などの破片が多く、これらは日常生活品です。土地の豪族・加久見氏が当時実際に使っていた品々であり、生活の匂いや中世土佐清水の情景をぼんやりとではあるが感じることができます。

そこには、デジタル教材やイミテーションにはない本物の持つ輝きがあります。三崎小 6 年生に「極上の社会科教材」＝「中世加久見地区出土埋蔵文化財」を堪能してもらいます。なお、『新市史』においては、松田直則編集委員、東近伸副編集委員長が分担して記述します。楽しみにお待ちください。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊

「市史第一次原稿」が少しずつ提出されてきています。職務などご多忙とは存じますが、蒸し暑さに負けず、一字一字確実に書き切り、原稿の完遂をめざしてください。